

The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1993年 1 月

Vol. 29, No 3

「旭江文庫」の生みの親大賀寿吉氏のこと

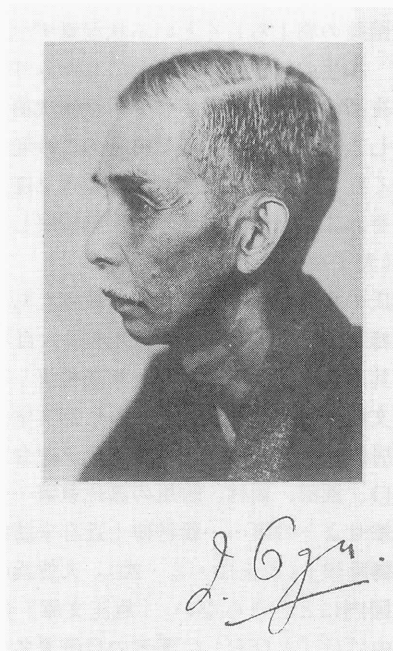
文学部教授

岩 倉 具 忠

「小生の文庫も追々に蔵書の数を増し目録を作らねばと存居申候へども時間も思ふに任せず止むなく打捨居申候 実とはかねて御承知の通り小生英語以外は一向に了解不仕従て蔵書も自分には読めざるもの多数ながらそれを眺めて喜び居り候は自分ながら偏なものとあきれ居候事にてただただこれらの書物を読み役立てらるる人を相待申居候事に御座候」。これは附属図書館所蔵の「旭江文庫」の生みの親である大賀氏（1870—1936）がダンテの『神曲』を翻訳中の山川丙三郎に送った大正十一年四月十四日付の書簡の一節である。大賀氏はやや自嘲気味にいかにも自身を単なる好事家であるかのように語っているが、氏はダンテとイタリア中世文化にきわめて造詣の深い一家をなした学者であり、しかもつねに愛蔵する書物を惜しみなく研究者に解放し、後進のために役立てることを願っていた。ここには大賀氏が「旭江文庫」を形成した蒐書方針がさりげなく語られているのである。

「旭江文庫」についてはすでに本紙上や京大広報等で紹介されているので、この度はこの類例を見ない文庫を築き上げた大賀氏の周辺を探ってみたい。実はそのためにたいへん都合な資料が残されている。先にその一部を引用したが、山川丙三郎に宛てて大賀氏の書き綴った二百通にのぼる

膨大な書簡がそれである。この書簡からは大賀氏の人となり存分にうかがえるばかりでなく、ダンテ研究家としての蒐書への情熱が読むものにひしひしと伝わってくる。またそれは大正から昭和の初めにかけての日本におけるイタリア研究の実情ならびに文化全般にわたる詳細を如実に映し出すまたとない史料でもある。



大賀氏は岡山出身で、この都市を貫流する旭川にちなんで「旭江」を号とした。文庫の名称もそれに由来する。大賀氏は大阪の武田製薬株式会社に勤務するかたわらダンテ研究に心血を注ぎ、終生ダンテ文献の蒐集に文字通り挺身した。氏の蒐書は興味本意の好事家のそれとは程遠く、ダンテ学者としての見識に基づく選書基準によって厳密に学問的価値のある質の高いもののみを対象としていることは万人の認めるところである。それだけに情報量の乏しかった当時蒐書がいかに労苦の伴う作業であったか、また待望の書物を入手した時の喜びがどんなものであったかがその書簡の行間からうかがえるのである。氏はまた研究者にダンテ文献に関する貴重な情報を提供し、学問的助言を呈し、書物を寛大に貸し与え援助した。のみならず自身もダンテ学の普及のために進んで啓蒙的役割を果たした。そんなわけで次の一節のように、山川丙三郎には翻訳上の細部にわたる助言を惜しまなかったばかりか、滞りがちの筆を啣つ訳者を慰撫することさえしばしばであった。「『新生』御翻訳進み不申由御申聞御至理に存申候 かかる書物の翻訳は決して急ぐべきにあらずゆるゆる御心持の向ふままに御策遊ばされてこそと存候事に御座候 近頃ことに拙速に走りて一夜漬の著述翻訳雨後の筈よろしくといふ状況難すべき事に御座候 小生の如きも不幸にしてしんみり勉強も不致一夜漬の講演に其場をつくらひ候次第実に御恥づかしき限に御座候 但し自分のこの恥を感ずこと深く従て一人にてもダンテの如きを深く研究さる人をおこしたしとあせり候次第御察しされ度候」(大正12・7・6)。

大賀氏の書簡からは京都大学の教官たちとの交流の様もうかがえる。「ダンテ永眠六百年記念会の儀其内京大の浜田博士等と相談相決し度存居申候 文科の教授連を会員とせる京都文学会にて発行致居候『芸文』は九月号をダンテ記念号といひ坂口、浜田、新村、厨川の諸氏執筆……小生にも執筆せよとの事……新村博士近日来訪相談ある筈に御座候」(大正10・2・20)。大賀氏の際限は国内にとどまらない。「旭江文庫」所属の書物の中には「とびら」に著者の自筆署名や献辞

の記されたものが少なからずあって、大賀氏と西欧のダンテ学者との親交の跡が偲ばれる。たとえば近世イタリア哲学の泰斗クローチェや英国の著名なダンテ学者トインビーなどと文通があったことは書簡からも知られるのである。

大賀氏の書簡を通して、大正から昭和にかけて日本ではダンテへの関心が高まり、多くの翻訳や著作が世に出た様子が手に取るようにわかるが、氏はそうした傾向を喜ぶ一方で、その多くが浅薄な半可通であることを慨嘆している。新潮社版「世界文学全集」に収められた生田長江訳の『神曲』には、よほど堪えかねた様子で、次のようなくだりがある。「生田訳神曲一読仕候。『何でも屋』を誇る人がかかる傑作を訳するは冒瀆とも感ぜられ不真面目なる序文アキレ申候。貴訳利用と思はるる所不少候」(昭和4・9・19)。「我国にも此頃は折々ダンテに関するものの刊行せらるる様に相成り感謝にたえざる事ながら、さて其内容を見れば腹立たしくもあり、なさげなくもありという次第なるは残念に存申候。『万有文庫』の神曲、新生及び詩集の訳、これは己刊の日本訳をくづしたるものなるべく、ダンテを全く台なしにいたし申候」(昭和2・11・13)。これに対する山川丙三郎の返事(下書き)には「惣じて近頃書肆にあらはるる訳本や批評類にはいかがわしきもの多く……去年出版されしダンテ小詩小曲集なるものは久保正夫氏のダンテ詩集を口語に直したるものなること明瞭にてそれも序文に何等久保氏のことを記し置候ざるは不徳の仕打と存候。他人の訳ばかりを台にして自訳を製造する発明人は日本にのみあるにあらずやと存じその勇氣におどろくの外無之候。」

(昭和2・11・24)とある。ちなみに大賀氏は当時ダヌンツィオとの華やかな交際で大衆的人気を博していた下位春吉について、「下位氏は何か名を売るに急なるやに相見へ小生などとはやり方大に異なるやに思はれ申候」(大正10・2・20)と批判している。

最後に一昨年大賀氏の令孫松井恵美子氏から附属図書館にご恵贈いただいた大賀氏所蔵のダンテの胸像(次頁写真参照)については次の一節が見られる。「独逸の一友人より贈与のダンテの胸像

(ブロンズ製) 近日到着の筈に御座候 多分相当芸術的価値を有するものと信じ申候が果して実際に相当に見らるるものにててもあれば写真葉書を作り度存居申候」(大正10・4・1)とある。ただし胸像到着後の模様についての記述は見当たらなかった。大賀氏が胸像の「芸術的価値」についてどんな判断を下したか聞けないのが残念である。

付記 文中引用した大賀氏の書簡は、「イタリア学会誌」3、7、8、9の各号に分載された「大賀寿吉氏の書簡」(木村文雄編)による。



御存知ですか? — 附属図書館サービス紹介

附属図書館には現在73万冊を越える図書と1万9千余のタイトル数の雑誌を所蔵しています。これらの資料や本図書館をより有効に利用していたくために、今号より、利用のしかたやサービス内容について、順次紹介していく予定です。今回は、カウンターでよくお尋ねのある事柄からその一部をご紹介します。なお、次頁に附属図書館の開館日とサービス内容の一覧を掲載しましたのでご覧下さい。

《資料の探し方》

附属図書館には京都大学の全学の総合目録があります。図書の場合、1985年3月以前のはカード目録で、それ以降のものは端末(オンライン目録)とカード目録を併せて検索して下さい。端末で検索した場合には、書誌情報の画面でファンクションキーA4(所蔵のキー)を押すことで、その図書が開架か書庫にあるかが分かりますが、カード目録で検索した場合は分かりません。どうぞカウンターでお尋ね下さい。

雑誌の所蔵状況・所在の検索は端末か冊子体の雑誌目録をご利用下さい。

文献の探し方がわからない、あるテーマに関する情報を提供してほしい、という時は参考調査サービスをご利用下さい。

《資料の配置について》

★附属図書館の図書の分類には1982年までの「京都大学附属図書館和漢書分類法」「同洋書分類法」(旧分類)と、1983年から使用している国立国会図書館分類(新分類)の2種類があり、別々に配架しています。ある分野の図書を探す際には旧分類と新分類の両方をご覧下さい。

★参考図書は1階奥に配架しています。

★雑誌は、新着分(当年度分)・5～10年前の分・それ以前の分、と分けて配架しているものが多いのですが、雑誌によって違いますので、ご遠慮なく雑誌のカウンターでお尋ね下さい。

★新聞は新聞ラウンジに前日の夕刊と当日の朝刊を置いています。それ以前のものはカウンターで請求して下さい。

